
紀要「山口学研究」 【第6巻】

目 次

I 巻頭言

山口学研究センター長 重松 宏武

II 山口学研究センターについて

III 研究論文（2022 年度採択プロジェクト）

研究プロジェクト名：障害者の学校卒業後のキャリア発達支援と馬関連産業を通じた生涯学習支援に資する学習プログラムの開発

「障害者の学校卒業後のキャリア発達支援と馬関連産業を通じた生涯学習支援に資する学習プログラムの開発」

佐々木 直樹，松岡 勝彦 1

IV 研究論文（投稿分）

「ジオパークにおけるユニバーサル・ジオツーリズムを目指して

— 山口県内の2つのジオパークを例として —」

脇田 浩二，西尾 建 4

「山口県をルーツとする無核ユズ‘多田錦’の起原に関する研究」

北島 宣，五島 淑子 20

「『語録』を通じた『偉人化』の分析 —「アベノゴロクかるた」を事例に—」

桑畑 洋一郎 29

「山口市平川地域における土地利用変遷と洪水土砂災害リスクの評価」

山本 晴彦，吉武 実梨，古場 杏奈 41

「2025 年 8 月 10 日に山口県周防灘沿岸で発生した豪雨の特徴と宇部市における浸水被害の概要」

山本 晴彦 64

V 投稿規程 84

VI 編集後記

巻頭言

山口大学が誇る多様な専門知を地域のフィールドに還元し、共に課題解決と価値創造を目指す「山口学研究」プロジェクト。その真摯な探究の結晶である紀要「山口学研究」第6巻を、ここに皆さまにお届けできることを大きな喜びと感じております。本紀要は、山口の自然環境、歴史文化、産業構造、そして教育や福祉といった多面的な事象に光を当て、地域社会の活性化と新たな「知」の創出に寄与することを目指して重ねられてきました。今回の第6巻には、研究プロジェクト1報に加え、公募による意欲的な投稿論文5報の、計6報を収載しています。

現代の地域社会が直面する課題は複雑であり、単一の学問領域だけで解き明かせるものではありません。だからこそ「山口学研究」では、文系・理系の枠組みや組織の垣根を越え、異なる専門性を持つ研究者たちが知恵を出し合う「総合知」のアプローチを大切にしてきました。地域の教育機関や行政、そして住民の皆さまと対話を重ねながら進める学際的な実践こそが、私たちの研究の大きな推進力となっています。

今号に並ぶ論文群も、そうした多様性と地域への深い眼差しを体現するものばかりです。研究プロジェクトでは、障害を持つ方々のキャリア発達と地域の馬関連産業を結びつけた生涯学習プログラムの開発成果が報告されています。続く投稿論文では、県内ジオパークにおけるユニバーサル・ツーリズムの可能性、無核ユズ「多田錦」の起源に迫る農学的アプローチ、「アベノゴロクかるた」がもたらす社会的影響の分析など、バラエティに富んだ論考が揃いました。同時に、山口市平川地域での長期的な洪水・土砂災害リスクの緻密な評価や、2025年8月の周防灘沿岸豪雨に伴う宇部市での浸水被害の検証など、地域の安全を支える実践的な防災研究も含まれています。

私たちはこれからも、大学のネットワークと知の資源をフルに活かし、「楽しく夢のある研究を地域とともに！」というモットーを胸に、山口の未来を切り拓く研究活動に邁進していく所存です。本誌が、地域を愛し、その未来を思索する皆さまにとって、新たなインスピレーションの源泉となれば幸いです

令和8年7月21日

山口大学山口学研究センター長
重松 宏武



山口学研究センターについて

平成 27 年 12 月 9 日、山口大学創基 200 周年事業のひとつとして、「山口学研究センター」を設置しました。同センターは、山口県をフィールドとした自然・文化・歴史・産業・観光・流通・教育等に関する研究を推進するとともに、その成果を活用し、地域社会の活性化に寄与することを目的としています。

この目的に沿った研究プロジェクトを公募・選定し、選定した個々のプロジェクトに対する支援（経費、広報、学外との調整など）を行うとともに、迅速な情報発信によって研究成果を地方自治体や地域社会に還元することで、地方創生や地域活性化の取組に繋げていきます。

山口学研究センター紀要「山口学研究」投稿規程

(目的等)

第1条 山口大学における山口県の自然文化、歴史、産業、観光、流通、教育等に関する研究成果を活用し、もって地域社会の活性化に寄与することを目的として、山口学研究センター（以下「センター」という）紀要「山口学研究」（以下「紀要」という。）を発行する。

2 紀要の編集及び発行は、本規程の定めるところによる。

(投稿資格)

第2条 紀要に投稿できる者は、次のとおりとする。

- (1) 本学の常勤及び非常勤の教職員（退職者を含む）
- (2) (1)に定める者を代表者とする山口学研究プロジェクトの共同研究者
- (3) その他、紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が認めた者

ただし、共著者についてはこの限りではない。

(原稿の種類)

第3条 紀要に投稿できる原稿の種類は、「山口学」に関する内容とする。「山口学」とは、山口大学が推進する、山口県に関わる文理融合の研究である。

(原稿の体裁)

第4条 原稿は原則和文とする。原稿はA4判（上下左右に各20mmの余白）にMS明朝10ポイントで横2段組（25字×50行×2段）とし、原則として、図・表・写真を含み12ページ以内とする。原稿は電子媒体で、使用するファイル形式はwordファイルとする。

(原稿の形式)

第5条 下記の(1)～(6)の形式とする

(1) 表題等について

表題はMS明朝18ポイントの太字、執筆者氏名はMS明朝16ポイントの太字とし、所属をMS明朝14ポイントとする。一方、英語標記では、表題及び執筆者氏名をTimes New Roman16ポイントとし、所属をTimes New Roman14ポイントとする。

(2) 要旨

要旨は400字以内で、背景・目的・方法・結果・結論等を簡潔に記載する。

(3) 本文

和文の句読点は全角「、」「。」「」を用いる。

章立ては1 2 3 …（全角太字）と太字で表記する。節は1.1. 1.2. …（半角太字）のように太字で表記する。

(4) 図・表・写真

図・表・写真は本文中に挿入し、キャプションも含め版面に収まるよう作成を行い、記載の順序に番号を付ける。線画をスキャニングする際には、解像度は仕上がり時の寸法で 1,200dpi 以上に設定する。また、写真をスキャニングする際には、解像度は仕上がり時の寸法で 350dpi 以上に設定する。本文と図・表・写真の間は、一行空白を設けることが望ましい。

図・表・写真の番号及びキャプション(タイトルや説明)の位置は、図・写真の場合は図・写真の下側、表の場合は表の上側とする。

(5) 注釈

注は、1)、2) のように通し番号による上付き数字で示し、本文の後(引用・参考文献の前に)に【注】の項目を建て一括して記す。

例：．．．である¹⁾。

【注】

1) 注は本文の後に一括して示す。

(6) 本文中における文献の引用方法

引用・参考文献については注釈の後、論文の末尾に【引用・参考文献】の項目を建て、日本語文献と英語文献を分けて日本語の場合は著者名五十音順、英語の場合は abc 順で一覧にする。

本文の該当箇所に、著者 1 名の場合(著者姓○○, 刊行年) 例：(田中, 2015)、著者 2 名の場合(著者姓○○・著者姓○○, 刊行年) 例：(田中・中村, 2015)、著者 3 名の場合(著者姓○○ほか, 刊行年) 例：(田中ほか, 2015) と表記する。

(7) 引用・参考文献一覧の作成様式 (日本語の場合)

=著者姓名=, XXXX (刊行年), 「=論文名=」, 『=書名=』, 発行者, pp. XX-XX (開始頁と終了頁). (巻 号 頁 は vol. no. pp. で統一)

論文名は「」でくくり、雑誌名を『』でくくる。書籍の場合は、引用内容を「」でくくり、書籍名を『』でくくる。

例： 山下浩一, 1998, 「○○に伴う裂傷の頻度・部位・予防法」, 『日本○○学会誌』, ○○書店, pp. 97-600.

[URL のみを表示する場合]

上記と同様に引用先の名称と年号に続いて引用箇所のタイトルと URL を付す。

例： 防災財団, 2018a, 『地域防災指針』 <https://www.bosai.co.jp/content/1266645>

(8) 引用・参考文献一覧の作成様式 (英語の場合)

Last Name に続いて、Middle Name と First Name を頭文字とピリオドで表示、各著者の間はカンマでつなぎ、最終著者との間は and でつなぐ。年号に続いて、文献名を“ ” で囲い、雑誌名はイタリックで表示する。巻号は、vol. 及び no. で表示

し、頁は pp. の後に最初と最後のページ数をハイフンでつなぐ。doi が分かる場合は、doi の URL を添える。

例： Hill, V. A., Barber, E., Carter, N., and Volt, E., 2019, “Turbidity Current caused by Tsunami, 2011”, *Natural Science*, vol. 7, no. 42, pp.23-52, <https://doi.org/10.1166/s40939-018-0353-8>

[書籍全体を引用する場合]

著者名と年号（表記方は上述に準じる）の後に書籍名を“ ” で囲んで表示し、カンマのあとに出版社を表示し、頁数の後に p. を付す。

例： Raymond, B., 2003, “Future of Robot”, Mechanic Publishing Co. Ltd., 366 p.

[書籍の一部を引用する場合]

著者名と年号（表記方は上述に準じる）の後に、引用部の名称を“ ” で囲い、*In:*（イタリック）の後に編集者名を書き、(ed.)あるいは(eds.)と書いたのち、イタリックで書籍名を表示し、カンマのあとに、引用頁数(pp. -)と出版社を示す。

例： Abbot, V. A., Charleston, E., Porter, N., and Vail, E., 2015, “Ancient Music before J. S. Bach” *In:* Thompson, A.B. and Carry, O.N. (eds.) *Music Science*, American Publishing Co. Ltd. pp.3-66.

[URL のみを表示する場合]

著者ないし引用元の名称の後に閲覧した年号を付し、続いて URL を表示する。

例： World Heritage Organization, 2019, “Preservation Protocol of Karst Heritage” <http://www.worldheritage.com/663546.3.pdf>

(9) 引用・参考文献一覧の配置

文献の 2 行目を全角 1 行(半角 2 行)下げる。

例：

山下浩一, 1998, 「〇〇〇〇〇〇〇〇に伴う裂傷の頻度・部位・予防法」, 『日本〇〇学会誌』, 〇〇書店, pp. 97-600.

Abbot, V. A., Charleston, E., Porter, N., and Vail, E., 2015, “Ancient Music before J. S. Bach” *In:* Thompson, A.B. and Carry, O.N. (eds.) *Music Science*, American Publishing Co. Ltd. pp.3-66.

(原稿の投稿)

第 6 条 紀要に投稿しようとする者は、委員会が定める期日までに、センター事務局に対し、委員会が指定する内容に従って原稿を提出しなければならない。

(審査)

第 7 条 投稿された論文の審査は、委員会が行う。

(論文掲載の可否)

第 8 条 投稿論文の掲載可否は委員会が決定する。原稿の体裁・内容などについて、委員会により指名された査読委員による査読を経て著者に修正を求めることがある。査読委員による査読は 2 回までとする。

(校正)

第9条 投稿者が自らの責任で校正を行う。

2 校正は、原則として編集に関わる修正（誤脱字、句読点、図表の配置、軽微な表現の訂正など）のみを対象とし、大幅な修正・加筆は認めない。

(著作権等)

第10条 投稿された論文等の著作権は、センターに帰属するものとする。

2 本文の一部や図・表・写真等を他の著作物から転載したり、オリジナルを掲載したりする場合、著作権に関わる問題や法令上の手続きは、投稿者があらかじめ処理するものとする。それらについて問題が生じた場合は、その責は投稿者が負うものとする。

3 投稿者は、センターに対して、当該論文等の印刷、電子的記録媒体（CD-ROM、DVD-ROM等）への変換・複製、学内外への配布及び公開を原則として許諾するものとする。

第11条 この規程の改廃は、委員会の議を経て行う。

附 則

1 この規程は、令和元年10月1日から施行する。

附 則（令和3年2月1日変更）

1 この改正は、令和3年2月1日から施行する。

附 則（令和6年11月1日変更）

1 この改正は、令和6年11月1日から施行する。

○その他紀要に関する事項

1. 原稿締切日について

原稿締切日はセンターにより採択されたプロジェクトに係るものについては支援終了の翌年度末まで、その他のものについては、投稿前に下記連絡表により投稿者が示すものとする。

2. 原稿の様式について

原稿様式（和文）を投稿者に対して電子データで提供する。

3. 査読について

投稿者は査読を行う者2名を委員会に対して推薦する（下記表に2名記載してください）。

4. 謝辞について

センターにより採択されたプロジェクトに係るものについては、山口学研究センターのサポートがあったという内容を記載し、それ以外は必要に応じて自由記載とする。

以下の内容について、総務企画部地域連携課地域戦略係 (sh034@yamaguchi-u.ac.jp) まで連絡願います。

投稿者氏名	
投稿者所属	
内 容	簡潔に記載願います。
原稿提出予定日	令和 年 月 日
査読者 1	所属・氏名等
査読者 2	所属・氏名等

編集後記

山口学研究では、山口県に関係する様々な分野の研究を網羅し、文系・理系の分野融合を目指した新しい研究分野を扱っています。第6巻に当たる本誌には、次の6編の研究論文が掲載されています。それらは、脇田・西尾による山口県内の2つのジオパークにおけるユニバーサルツーリズムの取り組み、北島・五島による無核ゆず‘多田錦’の起源に関する研究、桑畑による「アベノゴロクかるた」を事例とした語録を通じた偉人化分析の研究、山本・吉武・古場による山口市平川における土地利用変遷と洪水土砂災害リスク評価の研究、山本による周防灘沿岸の豪雨と宇部市の浸水被害の研究、である(以上、敬称略)。

いずれの研究も、山口県のさまざまな問題を解決するために、積極的に推進された研究であり、山口県の持続可能な発展に寄与するものばかりである。同時に、山口大学の研究ポテンシャルを内外に示すものであり、今後の研究の益々の発展が期待される。山口学研究は、山口大学が地域に根ざした研究を推進する機関であることを証明する一つの重要な役割がある。今後も、多くの研究が、この紀要に投稿されることを切に願っている。

令和8年7月21日

山口学研究センター紀要編集委員長

脇田 浩二

編集委員

前坂 祥子

山口大学山口学研究センター紀要「山口学研究」 第6巻

発行日 令和8年7月21日

発行 山口大学山口学研究センター

〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

TEL 083-933-5630

編集 山口大学山口学研究センター紀要編集委員会
